

『街道の近江菓子』一食と名物一

江戸に幕府が開かれてまもなく、東海道・中山道などの街道や各地の宿場が整備され、多くの旅人が行き来するなど各宿場は大いに栄えました。米原市内で中山道筋にある柏原宿・醒井宿・番場宿や北国脇往還筋の春照宿などもそのひとつです。

当時の旅は自然条件などもあり、決して楽なものではなかったようです。しかし、街道の随所には、その土地の名物や名産があり、人々の往来が盛んになると、それら名物などを紹介した名所図会や旅の案内書（ガイドブック）である道中記などが多く出版されました。

旅人はそれらを見ながら名物を賞味し、ふるさとの土産として持ち帰ることが旅の楽しみのひとつでもありました。

そこで、中山道をはじめ道行く旅人が旅先で舌鼓をうち、土産として持ち帰った名物を紹介した企画展『旅ゆけば一食と名物一展』を、去る10月31日から11月26日まで柏原宿歴史館で開催いたしました。

【栗きんとん】（中津川宿）

江戸から京都へ向かう旅人が美濃へと足を踏み入れ、まず出会う名物と言えば、中津川宿の栗きんとんでしょう。

中津川宿周辺では良質の栗が多く収穫され、自家用だけでなく旅人にも出されました。

中津川の秋の風物詩である栗きんとん。街道をゆく多くの旅人が栗の香りと旨味を閉じ込めた名物を求めていました。

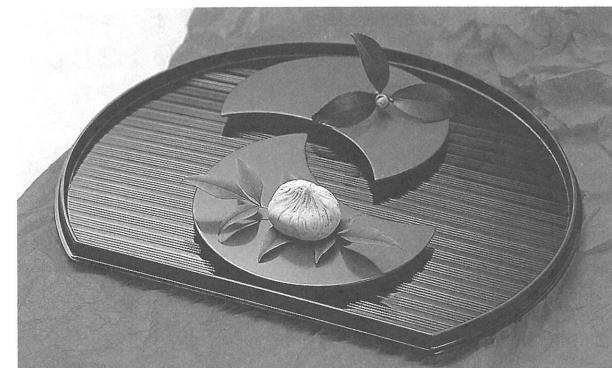
【伊吹もぐさ】（柏原宿）

「伊吹艾」は古くから有名で、多くの歌などにも詠まれています。

柏原宿名物のお灸“伊吹もぐさ”は、近くの伊吹山で産する蓬の葉を原料としていました。もぐさを小さく切ってツボにのせ火を付けると、神経痛や足の痛みなどによく効き、旅人がこぞって求めたといいます。

全盛時には十軒ほどの艾屋が軒を並べており、そのほとんどが「亀屋」という屋号を名乗っていました。

（桂田峰男）



▲栗きんとん

情報 BOX

◆米原市教育委員会では、平成18年11月23日に国史跡の山岳寺院・弥高寺跡の発掘調査現地説明会を開催しました。

「弥高寺跡発掘調査現地説明会資料」（配布中）
※発掘内容の詳細は24号をご覧ください。

◆米原市伊吹山文化資料館では、平成17年度の活動を記録した下記の書籍を刊行しました。

『伊吹山文化資料館年報8』
※伊吹山中学校の総合学習に資料館友の会が協力した「自然探検隊ゼミ」の記録と論考を掲載。

◎問合せ先 伊吹山文化資料館 ☎0749-58-0252

◆米原市伊吹山文化資料館では、企画展『足元の宝石たち』で好評だった、村松佳優氏の昆虫写真をポストカードにしました。【6種類：各80円】

◆米原市柏原宿歴史館では企画展『旅ゆけば～食と名物～』の解説パンフレットを作成します。

◎問合せ先 柏原宿歴史館 ☎0749-57-8020

◆◆編集後記◆◆

米原市の文化財所管課は「文化スポーツ振興課」です■文化財とスポーツ一ちょっと見には、水と油。正反対にも思える二つの分野が合体しています■でも、よくよく見回すと編集子以外の文化財担当は、河内枚方の剣道少年と木屋町でブイブイゅわしてたB大弓道部元主将■おまけについて、なんと文化振興係は伊勢のK大ラグビー部！■結局、文化面担当もみんな体育会系じゃないですか■そんなことでわが職場は、課長が右といったら右。シロといったら「城」。体育会系の乗りで仕事をこなしています■唯一文化的な編集子は、黙々と月例会の準備やら、課の旅行の段取りやら…。下働きをこなす毎日です。（シャンギリッズ）

米原市文化財ニュース

佐 加 太 第25号

発行 平成19年1月25日

編集 米原市教育委員会

〒521-0292 滋賀県米原市長岡1206番地
米原市教育委員会文化スポーツ振興課

TEL.0749(55)8106

印刷 (株)シバタプロセス印刷



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました

「峠」のシシ垣 一 農民の文化財 一

今回紹介する文化財がある場所、米原市大久保小字峯堂ならびに小泉小字峯堂・峠平は、標高約300m前後を測る姉川に張り出した台地です。伊吹山のセメント鉱山の真下に展開するこの地域は、地元で通称「峠」とよばれ、肥えた土壤や寒暖の差、山から吹き降ろす風などの自然の恵みを受けて、古くから農耕地として利用されてきました。古者は「大和時代から開かれた」と言い伝えますが、実際には、縄文時代中期の線刻を施した石劍や小型磨製石斧などが出土していることから、縄文時代にはすでに人々の営みがあったようです。

耕地がほとんどない大久保や小泉の人々は、この地を大切に守り、特に、ここで収穫される大根は「伊吹大根」「ねずみ大根」「辛味大根」などと呼ばれる特産種で、「峠大根」のブランド名を持ちます。

近年、この地に延長約900mの石垣がのこっていることが、地元を交えた調査などでわかつてきました。これは、イノシシやシカが農地に入つてこないように築かれたもので「シシ（猪鹿）垣」といいます。ここではこの「峠のシシ垣」について紹介します。

伊吹山に直結したこの地では、現在までイノシシを中心とした野生動物との戦いに、たいへんな苦労を強いられてきました。シシ垣に関する記録は少ないものの、地元の藤田家文書（小泉）のなかに、文政7年（1824）浜松藩役所へシシ垣構築を願い出たものがあります。

文書によると、文化14年（1817）の大雪で村が困窮しているうえに、峠地域の畑で大豆などの作物が「獅子（猪鹿）」に荒らされ、捨てて置けない状態まで困っており、領主である浜松藩に扶持米を求めていました。この10年後には、毎年の大雪で崩れた部分に対し藩直営での普請を願い出ています。シシ垣の総延長は約2.5kmにもなります。

シシ垣には「土居切込」「石垣」「両表石垣」の三種類があり、土居切込は耕地の山側法面を急傾斜に削ったもの、石垣はこれに石を積んだもの、両表石

第25号

2007年1月25日

滋賀県米原市教育委員会

垣は両側に石垣を積んだ石垣を指すと思われます。現状でもこれらの石垣が残っています。

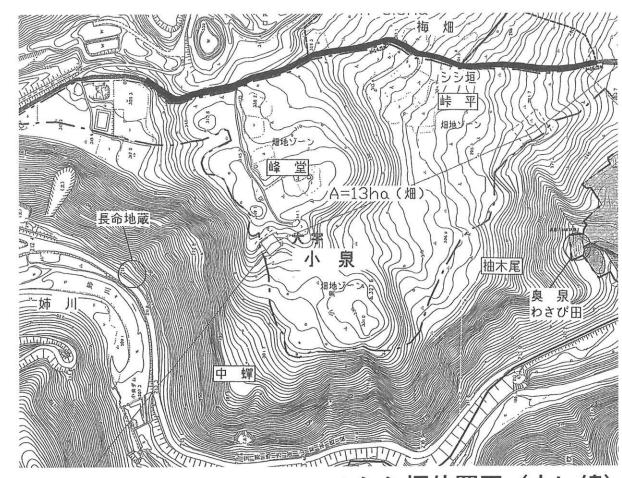
村を焼き尽くした大火、打ち続く凶作、大雪、そして山からの猪鹿の襲来とシシ垣普請の連続。一放つおいたら古くから守られてきた大切な畑が山林になってしまい百姓が成り立たない（「此但捨置候而者大切之畑山林同様ニ相成猶又百姓難相立」）という悲鳴に近い文言が、江戸時代末期、姉川上流の寒村の様子を物語っています。

反面、先祖たちが生きた伝統的な農村社会では、村人一体となって獣の被害に対応し、農作業・灌漑・道の補修や村祭まで、協力しあって行ってきました。シシ垣は、今日の農村では失われてしまつた「団結力」を学ぶ絶好の学習素材であり、さらに、現状や対策から獣との共存を考えることができる遺産です。まさに誇るべき「農民の文化財」！

（高橋順之）



▲峠のシシ垣



▲シシ垣位置図（太い線）

米原市のまつり ⑤

【滋賀県選択 無形民俗文化財】米原曳山祭 附曳山三基

毎年10月上旬の3日間（宵宮・本楽・後宴）にわたくて行われる湯谷神社の祭礼で、北町の旭山、中町の松翁山、南山の寿山の3基の曳山で子ども歌舞伎が奉納されます。

曳山祭りの起源は定かではありませんが、『改訂近江国坂田郡志』によると「明和7年、3輦の曳山を造り、祭日には児童をして狂言を演ぜしむ」とあり、明和7年（1770）頃に米原宿や米原湊などの経済力を背景に町衆によって始められたのではないかでしょうか。

旭山の棟木には「宝暦拾庚辰九月吉晨 大工藤岡重兵衛作之 神戸町」とあり、長浜の神戸町で制作された曳山であったことがわかります。

曳山の舞台では子ども歌舞伎が演じられる構造となっています。祭りの当日子どもたちはあでやかな衣装に身を包み、厳しい稽古の成果を披露します。秋の休日、にぎやかなシャギリの音が町中に響きわたります。

（桂田峰男）



▲曳山子ども歌舞伎

その後の息長氏(2)

昭和58年、静岡県袋井市の茶畠から梵鐘が掘り起されました。鐘の人気さは全長91cm、直径53cmで三面にわたって銘文が鋳出されていました。その第1区には、

「参河国渥美郡東紀里岡寺

太政官高松院 御施入鐘一口

依 宣奉勅 左衛門尉 藤原師光

平治元年 歳次己卯八月十三日 被賜下

但雖此鐘請預為不漏十方施主助

成相副奉加之銅以同二年 歲次庚辰正月

三日鑄之矣

小鎔師息長法修

同 定房

とあり、この梵鐘が三河国東紀里岡寺の鐘で平治元年（1159）に鋳造されたことがわかります。東紀里岡寺とは現在の豊橋市二川町に所在する普門寺の背後の山中に遺構を残す寺院跡だと考えられます。

注目すべきはこの梵鐘を作成した小鎔師が息長法修、同定房と鋳出されていることです。この息長氏が直接近江坂田郡の息長氏と結び付くものではありません。

ませんが、息長丹生真人一族が画工集団であったことを考えると、あるいは鋳師となつた一族もいたのかも知れません。

（中井 均）

※参考文献

『目でみる袋井市史』1986

東郷公司「普門寺の古鐘」『湖西の文化』第27号 1999



▲梵鐘の銘文

（掲載写真は『目でみる袋井市史』より転載したものです。）

新・滋賀県指定文化財の紹介

【絵画】絹本着色兜率天曼荼羅図 一幅

所有者 成善寺院（米原市柏原）

法量 縦160.2cm 横113.4cm

時代 南北朝時代

兜率天とは弥勒菩薩が住んでいる浄土のことで、弥勒菩薩が兜率天で説法する様を描いたのが兜率天曼荼羅です。死後に兜率天への往生を願う弥勒信仰では、弥勒のお姿や兜率天浄土の様子を心の中に思い浮かべたり、造形化することが重要視されました。本図もこのような状況のもとで描かれたと考えられます。

図像は左右対称を原則として、上から虚空、摩尼宝殿、弥勒菩薩を中心とする諸菩薩・諸天、宝池、二重門を描き、中央には蓮華座上で結跏趺坐する弥勒菩薩がひときわ大きく描かれています。その周囲には菩薩衆、説法を拝聴したり舞踊奏楽を献じる天子・天女を配するなど、兜率天浄土の様相を表しています。

作風から制作年代は14世紀末、南北朝時代と考えられます。兜率天曼荼羅図の作例は極めて少なく、中世にさかのぼるものとして仏教絵画史上大いに評価される作品です。



▲絹本着色兜率天曼荼羅図（滋賀県立琵琶湖文化館写真提供）

【考古資料（追加指定）】

山津照神社古墳出土品

所有者 山津照神社（米原市能登瀬）

時代 古墳時代（6世紀中葉）

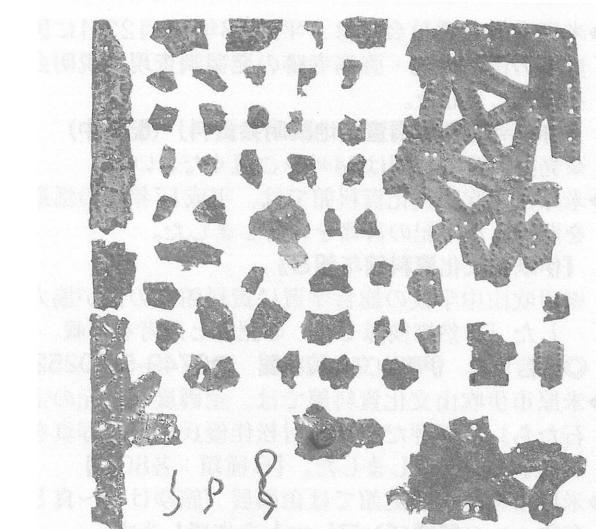
横山丘陵南端尾根東寄りの丘陵上に立地する全長46.2mの前方後円墳で、明治15年に神社参道拡張工事の際に発見され、家型石棺を納めた横穴式石室の存在が明らかになりました。

石室の内部からは、做製の銅鏡2面（獸文鏡・五鈴鏡）、金銅製冠、鉄刀、水晶製三輪玉、鉄製刀子、馬具（轡・杏葉・鞍金具・鑑・雲珠・辻金具・吊金具）、須恵器（蓋杯・提瓶・台付広口壺・広口壺・大型器台）、赤色顔料が、前方部から銅鏡一面（内行人花文鏡）、鉄剣、鉄塊が、墳丘から埴輪が出土したと伝えられています。

当古墳は、古代天皇と深い関わりのある息長氏に関連すると考えられ、近江だけなく、日本の古代史を理解するうえで欠かすことのできないものとして、出土品のうち県に寄託された資料が昭和32年に考古資料として県の指定を受けました。今回は、未指定のまま山津照神社に残されていた資料で、渡来系氏族や朝鮮半島との関りを示す金銅製冠、馬具

の壺鑑、鉄刀・鉄剣などの武具の一部、時代を決定する須恵器類の一部、葬送儀礼解明に必要な赤色顔料などが追加指定され、明治年間に出土した資料が一括して県指定となりました。

（2件とも平成18年3月17日指定）



▲金銅製冠破片（滋賀県立安土城考古博物館写真提供）